弁護士 伊藤茂昭 季刊通信

2019.12 第67号

白い雲

「村の教会」スロベニアのヤムニクにて
Photo by Kai Ito

ご挨拶

歴史の大きな曲がり角のなかで

2019年も暮れようとしています。

台風被害の甚大な年でした。大規模災害の頻発は、決して天災と片付けられる問題ではありません。地球規模の環境の悪化による被害の増大は、米国のパリ協定からの離脱に象徴される遅々として進まぬ温暖化対策による人災でもあるのです。将来の地球環境を守るために、各国のリーダーの責任は大きいと思います。私はこの地球環境を守る活動に何の寄与もできていませんが、身近なところでできる何かがあれば皆さんと一緒に取り組みたいと思っています。

また、AIの進歩は様々な分野で、驚異的な速度で、社会に変容を迫っていますが、人と人とのコミュニケーション能力など、人間がより幸せな方向へ向かって進化しているとは思われません。自身もスマホをはじめそれなしでは成り立たない生活をしております。24時間睡眠の時間以外は常に入り来る情報を意識する毎日です。しかし、このように便利になればなるほど、どこかに忘れ物のあるような気持ちを拭いきれません。

このような、歴史の大きな曲がり角のなかで、また新しい年を迎えます。

オリンピックに沸く中で、それに惑わされず、社会の中の忘れてはならない問題にもしっかりと目を向けて、自分に与えられた役割を果たして行きたいと考えています。

2019年12月

弁護士　伊藤 茂昭

Book

シゲニー・イートンの推薦図書（6）

疑惑の事故
日米地位協定の死角

与世田兼稔 著

ボーダーインク　本体1500円＋税

著者は、私と同期の弁護士。1980年東京弁護士会に登録、83年故郷の沖縄に戻り、法律事務所を開設、2004年に沖縄弁護士会会長。その後2011年～13年に沖縄県副知事を務めた。写真は、副知事就任祝賀会で挨拶をする与世田兼稔さん。

本書の主人公高村愁平は、大手新聞記者、事情があり那覇支局に飛ばされる。赴任した那覇で医師である米軍属マシュー・アダムズが大型ジープで交通事故を起こし被害者は死亡する。公務中の事故として日米地位協定に基づき第一次捜査権は米国にあり、日本の警察は逮捕・取り調べもできないまま、極めて軽い５年間の運転禁止処分のみで決着する。

これに対し、地元の女性新聞記者神山優海が疑問を抱く。被害者は地元資産家の娘大倉藍子、そして加害者と被害者が一時交際していたこと、しかし被害者が交際を断り他の男性と婚約したこと、その後被害者が加害者のストーカー行為に悩んでいたこと、それを被害者が沖縄県警に相談していたこと、これらの事実を掴み、神山優海は、これは間違いなく事故に仮託した殺人事件であると確信する。しかし如何せん、相談を受けた警察にも捜査権はない。

ここからの展開が、この小説の読ませどころである。法律家であれば、法律知識を駆使してどのような追及がとりうるのか。そのあたりに十分興味がわく。また、一般の読者は、日本国内の事件であるにもかかわらず、国家としての捜査権のないこの現実、――これこそが日米地位協定の問題点であること、その問題の解決のためにはどのような視点で立ち向かわなければならないのかという大きな問いかけが待っている。

主人公と神山優海と「髭マスター」と名乗るボランティアの３名を中心としてこの厚い地位協定の壁に挑む。そこでまずは民事の損害賠償請求を考える。

その結果は？　加害者マシューの被告適格は日米地位協定でどうなるのか？

雇用者である米軍は、日米地位協定で損害賠償義務を負わない定めである。

裁判所が指定したマシューの尋問当日、マシューは米国に帰国する。喚問すらできない現実。さて判決はどうなる？

米国での手続きは５年の運転禁止処分のみ、刑事処分に付されていないマシューに対し、検察審査会に異議申立を行うことができるか？　日本の検察審査会で起訴相当と議決することはできるか？

被害者の日記、友人や同僚医師の証言など様々な間接事実、ストーカー行為や脅迫等のメール、などの積み重ねで、人権派弁護士は活躍する。

そこで待っていたのはなにか。是非この本を読んでいただきたい。

Travel

歴史に思いを馳せる旅

沖縄本島北部一周の旅
この本の著者、与世田兼稔さんと

沖縄最北端辺戸岬にたつ祖国復帰闘争碑

10月25日、沖縄県那覇市で九州弁護士会連合会大会が開催された。私は、日本弁護士政治連盟副理事長・組織強化委員長として、この大会を機に開催される、弁政連本部と九弁連管内の弁政連支部の懇談会に出席するため沖縄入りしていた。

また、８月に大阪で開催された、32期40周年記念祝賀会で、研修所同期の元沖縄県副知事の与世田兼稔さんとお会いした際、この九弁連大会での再会を約束していた。

大会の翌日、与世田さんが自ら運転して私の宿泊しているホテルまで迎えに来てくれた。そしてそのまま、その車で沖縄本島北部を一周することにした。嘉手納基地、辺戸岬、辺野古などを一日かけて見学した。

彼は、世界一危険な空港「普天間」の現状を憂いており、一日も早い移転を望んでいる。普天間の移転先については過去長い間、嘉手納への併置案、伊江島案、そして佐賀県移転案、などがそれぞれ消えていったが、彼の説明では、元々の最善策は、海上に設置する案であったという。そしてそれが潰えた理由についても、彼は私に話してくれた。そして、もしそのときそれが採用されていれば、普天間からの移転も可能となり、辺野古の現在の状況は、避けることができたはずだと。

辺野古への移転については、沖縄県民の大きな反対運動があり、私もそれに賛意を表するところであるが、一方与世田さんは普天間の危険の解消を最大限優先して考えている。そしてもともとの米国との普天間返還の合意は、代替空港を設置することの条件付きであること、これを突き崩すには、本国政府が真剣に米国と交渉し、日米地位協定を改定すること、そしてそのためにはおそらく弁護人立会権を認める刑事訴訟法の改正が必須であることを付言した。すでに副知事を退任したとはいえ、その熱い志は健在であり、その熱情から生み出されたのが、本書「疑惑の事故　日米地位協定の死角」という小説である。

伊藤 茂昭

愛好会4周年記念パーティ

原田諒先生「トークショー」

原田諒先生のトーク

2019年9月14日、東京弁護士会宝塚歌劇愛好会創立4周年記念パーティが開催されました。会場は宝塚のOGさんもディナーショーなどの会場として使用することの多い一ツ橋の如水会館。

当日のメインイベントは、宝塚歌劇団の若手演出家、原田諒先生（経歴は別掲）のトークショーですが、サプライズで、元花組トップスター高汐巴さんがいきなり登場。一切の事前予告のない演出で盛り上がりました。これも、高汐さんの相手役だった秋篠美帆さんのアイデア。一時代を築いたトップスターが、メインテーブルにつき、一段と華やかになった会場で、原田先生のトークが始まりました。

高汐巴さんと秋篠美帆さん

原田先生のお話は、演出家になった動機に始まり、自らの演出した作品について、その企画から、シナリオの執筆、出演者との稽古など、一つの作品を作り上げていく過程について興味深い話題が満載でした。併せて会場から提出されていたご質問にお答えいただく中で、ふだんはお聞きできない多くのお話を拝聴することができ好評でした。またこれから外部でのオペラ「椿姫」に取り組むお話なども披露され、今後の劇団内外での活躍に皆さんの期待が膨らみました。

4th anniversary

続いてサプライズ参加の高汐巴さんと秋篠美帆さんの軽妙でお洒落なトークが会場を沸かせました。さらにはゲスト参加の、日経小説大賞を受賞した弁護士で小説家の赤神諒さんのスピーチがあって、楽しいディナータイムとなりました。赤神諒氏は、原田先生と大学同窓でペンネームが同じ「諒」ということもあり、お互いのお話が弾みました。その後、宝塚歌劇団生徒課課長飛鳥裕さんのご挨拶、出席OGさん全員からのショートスピーチなど和やかに進み、各テーブルもOGさんを交えた会話で、談笑が絶えませんでした。終了後は同じ如水会館内での二次会に移行し、出席OGさんのほとんどの皆さんが参加され、楽しい夜が続きました。皆様去り難い中で如水会館をあとにした夜でした。

ご参加いただいたOGの方々

高汐巴さま、万鯉たつ美（愛好会相談役 森本和子）さま、飛鳥裕さま、秋篠美帆さま（愛好会相談役）、こだま愛さま、三矢直生さま、光樹すばるさま、越はるきさま、麻乃佳世さま、森奈みはるさま、一紗まひろさま、天羽珠紀さま、悠未ひろさま、鶴美舞夕さま、綾月せりさま、玲実くれあさま、瑞羽奏都さま、すみれ乃麗さま、天真みちるさま、朝日奈蒼さま、はる香心さま、苑宮令奈さま（二次会のみ）

Profile

原田 諒（はらだ・りょう）

1981年生まれ。大阪市出身。同志社大学在学中の2003年に宝塚歌劇団入団。2010年演出家デビュー。演出作品で、2010年読売演劇大賞 優秀演出家賞、2012年ミュージカルベストテン演出家賞、2016年読売演劇大賞 優秀演出家賞及び優秀作品賞を受賞、2018年菊田一夫演劇賞などを数々の作品での受賞。受賞作品を含む近年の演出作品に「For the people―リンカーン 自由を求めた男―」、「ベルリン、わが愛」、「ドクトル・ジバゴ」、「雪華抄」、「MESSIAH―異聞・天草四郎―」、「20世紀号に乗って」、「チェ・ゲバラ」等がある。また外部でも、「ふるあめりかに袖はぬらさじ」、「大地真央ディナーショー」、「安蘭けいドラマティック・コンサート」などを手がけている。

〈心に残った一作品〉

雪組公演

「壬生義士伝」

世の矛盾の中にある確固とした人間愛

＜確固とした人間愛＞

浅田次郎の本格歴史小説、「壬生義士伝」。南部藩盛岡出身の下級武士「吉村貫一郎」が主人公。家族を養うために脱藩、新撰組に身を投じる。

新撰組の中での生き方に、貫一郎なりの武士道からくる「大義」を見出しつつ、すべての根源は家族愛。しかしそのために、敵を切り、故郷への仕送りのためのお金を稼ぐ。

この主人公の生き方が宝塚的ではないという一部評論家の劇評が、公演初日があけてすぐに日刊紙に掲載された。その批評は、主人公貫一郎の表面的な言動が愛をテーマとする宝塚にふさわしくないとする批判であるが、私にはとても正鵠を得たものとは思われない。そのような行動の直接的な契機となる家族や友人に対する深い愛情、そしてその愛情をこのような非情な形でしか表すことができない世の中の矛盾、しかしその中にある確固とした人間愛こそがこの作品のテーマなのである。そしてその吉村を演ずる望海風斗がその人間愛を表現し好演することによって表層的な一部劇評を完全に吹き飛ばしたと言って良いであろう。

＜望海雪組の総合力に喝采＞

組子一人一人が与えられた役どころを全うしそれが望海の吉村の演技を支えている。

幼なじみで藩の重臣、彩風咲奈扮する大野次郎右衛門との立場を超えた友情、次郎右衛門とその母親役の梨花ますみとの親子の情愛。貫一郎と盛岡に残したしづとの家族愛、京都でのみよとの出会い、そして、何よりも新撰組、彩凪翔の土方歳三、朝美絢の斎藤一、永久輝せあの沖田総司、それぞれの強烈な個性がぶつかり合いつつもみなそれぞれに好演、宝塚ならではの男役が打ち揃う舞台である。

＜故郷を歌う＞

また「東に遠く早池峰山（はやちねさん）南にそびえる……」と盛岡を囲む四方の山々を歌い、「城下流れる中津川」との歌声が流れると、観客自身の故郷の山川が胸に蘇る。宝塚随一の歌い手望海風斗の見せ場でもある。

そんな壬生義士伝を盛岡の皆さんにも観て欲しい。そんな思いで、弁護士で岩手県選出の国会議員、階猛先生にお声かけをしたところ、8月12日にご夫妻で東京宝塚劇場に足を運ばれた。

そして、劇場での会話、「ところで先生は岩手のどちら出身ですか？」「雫石ですよ」。なんと、お芝居の中に出てくる、主人公吉村が盛岡に残してきた家族が住んだのが雫石。その偶然に驚いたあと、奥様は、「私は東京ですが、新撰組ゆかりの日野です」にまたびっくりさせられた。これもまた何かの縁。宝塚は常に新しい人と人のつながりを紡ぎ出してくれる魔法の糸のようなもの。

＜浅田次郎の原作＞

さて、この作品の上演が決まってから浅田次郎の原作を読んだ。原作自身が面白く、上下二冊、あっという間に読み切ったが、それなりの分量である。それを二時間足らずの舞台にどのように納めるのか興味があった。また小説の展開は、明治時代に当時の取材者が、江戸時代の新撰組の歴史を知る者を訪ね歩き、それぞれの立場から当時のことを語るという体裁をとっている。脚本・演出の石田昌也先生は、それを明治時代の鹿鳴館の場面を作りそこでの登場人物に進行を委ねるという形に転換させた。その登場人物がやや多過ぎるかなという印象を持ったが、出演者の総数や、主人公たちの次世代部分を大幅にカットしつつ登場させるという手法であればやむを得ないと思って納得である。

この作品で、東京弁護士会宝塚歌劇愛好会の協力で日本弁護士連合会の今年度の副会長の皆さんの観劇会を開催させていただいた。観劇後の食事会も含め、それぞれ参加者の思いがあふれた東京の夜であってくれたのであれば幸いである。

東京弁護士会宝塚歌劇愛好会会長
シゲニー・イートン

追悼

兄 雅治の逝去

私の実兄の雅治が、本年９月１日、76歳で間質性肺炎のため亡くなりました。

９月５日の通夜、６日の告別式には、国会議員の先生、役所の方々、病院関係者をはじめ多くの皆様が、お忙しい中、会場の青山葬儀場までお運びくださりました。弟の私からも関係者の皆様に御礼申し上げます。

さて、私たち兄弟の生まれ故郷は新潟県、今は糸魚川市となった旧木浦村（このうらむら）、当時は雪の深い地域でした。私たちは二男二女の４人きょうだい、私が末っ子です。７年前に99歳で他界した父は教育熱心でしたが、子供にあれこれと進路を指示するようなことはいいませんでした。しかし、兄が地元の医学部に進んでからは、新潟市内で兄が開業医となってくれることを望んでいたと思います。しかし兄は、その道に進まず、医系技官として公務員の道を選びました。そして多くの国民の健康を守る仕事、医療行政に携わって来ました。医政局長を最後に厚労省を辞し、全国社会保険協会連合会の理事長についてからも、「患者の声を医療行政に反映するあり方協議会」の世話人として、患者のための医療政策の推進のために力を注ぎました。そんな兄のことは私も誇りに思っています。

兄が医学部でインターン制度の廃止を掲げて運動をしていた影響で私も医学部在学中に学生運動に走り、その後法学部に方向転換し、東京で弁護士になる道を選びました。二人とも親の夢を叶えることはできませんでしたが、両親も兄の生きた人生をよくやったと褒めてくれていると思います。できることならもう少し長生きして、のんびりと趣味のシャンソンを歌う時間を楽しんで欲しかったと思っています。

最後に、2019年９月27日付けの日本経済新聞夕刊「追想録」の記事を紹介し結びとします。

追想録

医療政策 信念で動かす

伊藤 雅治さん
（元厚生労働省医政局長）

医系官僚として厚生労働省の局長を務めた後、患者の声を医療政策の決定プロセスに反映する活動に力を注いだ。

新潟大学の医学部生時代は無給研修（インターン）制度の廃止運動を先導し、実現後に保護所勤務を経て1971年に厚生省（当時）入省。結核や薬害エイズなど感染症対策のほか、「寝たきり高齢者ゼロ」を目指し、訪問看護など現在の介護保険サービスの基盤を整え、2001年に医政局長を最後に退官した。

全国社会保険協会連合会の理事長として社会保険病院の改革・再編に道筋をつける一方、医療費の削減をトップダウンで決める政策で医療現場が疲弊する様を目の当たりにした。

「国民も加わって負担と給付のバランスを見いだす必要がある」。東京大学の医療政策人材養成講座で学び直してまとめた提言が患者会有志が集う「患者の声を医療政策に反映させるあり方協議会」を生んだ。

協議会の活動もあり、患者の権利などを定める医療基本法は制定へ動き出した。協議会代表世話人の長谷川三枝子さん（78）は「行政と国民の立場を知り、穏やかな人柄ながら強い信念を持って医療を動かす人だった」と悼んだ。

＝9月1日付、76歳

（前村聡）

Activity

伊藤茂昭・日々の活動記録

日弁連等の主な活動から

＜日弁連定期総会議長＞

６月14日弁護士会館クレオで開催された日弁連定期総会で議長を務めました。副議長は山梨県弁護士会の田邊護先生と第一東京弁護士会の巻淵眞理子先生。会場からの発言を制限することなく議論を尽くし予定時間内にすべての議題を終了することができました。（写真右）

＜日弁連弁護士任官等推進センター委員長＞

このお役目も２年目に入りました。弁護士の非常勤裁判官の制度は人数も増え着実に運用され成果を上げていますし、裁判官が弁護士として法律事務所で働く他職経験の制度も順調です。課題は少数にとどまっている常勤裁判官の採用ですが、2020年度には、是非多数の常勤裁判官を弁護士から送り出したいと願っています。

＜日本弁護士政治連盟副理事長・組織強化委員長＞

弁政連の組織強化委員長は、全国に８ブロックある弁連の大会に併せて開催される弁政連本部と支部の懇談会に出席するため、全８ブロックを回ります。今秋も、関弁連・新潟市、中部弁連・岐阜市、九州弁連・那覇市、中国弁連・岡山市、四国弁連・松山市、最後は近畿弁連・奈良市と元気に勤めを果たしております。

事務所の業務から

＜相続・資産承継チームリーダー＞

相続・資産承継チームを代表して、７月５日には日本経済新聞社主催の日経セミナーの講演に登壇しました。800名の聴衆の入るホールが満杯で、竹中平蔵氏の講演に続いて、「賢い相続対策」と題して、改正相続法にも焦点を当てつつ、「賢くない」具体的事例をあげて講演を行いました。

以前は、社団法人きんざいのFP講座などでよく講演を行っていましたが、最近は、会務等に時間が割かれこのような企画に参加する機会がなかったのですが、久しぶりの講演を多くの聴衆の前で行うことができ、自分にとっても有意義な時間となりました。

連載第４回　弁護士伊藤茂昭 事務所の歴史

- 山本忠義法律事務所～山本・泉法律事務所
- ▶ 伊藤茂昭法律事務所
- 伊藤・松田法律事務所
- 東京シティ法律税務事務所
- シティユーワ法律事務所

1983（昭和58）-1987（昭和62）伊藤茂昭法律事務所時代 -その2-

弁護士3人、事務員4名の事務所へ

先回は昭和58（1983）年に、それまで３年間お世話になった山本忠義法律事務所（後半は山本・泉法律事務所）から独立し、伊藤茂昭法律事務所を設立したことに触れました。そのとき創刊した「白い雲」は、文字通りの季刊で３ヶ月に一回のペースで発行していました。約２年間、第10号までですが文字通り季刊でした。その後は発行間隔があいたりしましたが、なんとか継続して今日に至っています。

さて、そのころの事務所の主な出来事ですが、1985年４月に、最初の勤務弁護士として、松木信行弁護士が入所、続いて同じ年の10月に溝口敬人弁護士が入所したことです。松木弁護士は37期、私と同じ新潟県糸魚川市出身で、もともと同郷ということで縁故がありました。一方、溝口敬人弁護士は、中央大学の研究室で受験指導をした後輩でした。すでに２年６ヶ月他の事務所で弁護士経験があり即戦力として事務所に迎えました。こんな後輩に恵まれ、伊藤茂昭法律事務所は設立３年目で弁護士３名、事務職員４名、計７名になりました。このころの事務所では私のアイデアで、既婚者は配偶者の誕生日を、独身者は両親の誕生日を休日としたことです。事務所の規模が小さいときはこのように家族的な経営が許されましたが、事務所の規模が大きくなるにつれ、このような試みはなくなっていきました。

白い雲については、宝塚の記事はこの頃はまだ少ないのですが、第４号では、事務所のメンバーを中心に月組東京公演「翔んでアラビアンナイト」を観劇したとの記事があります。白い雲の宝塚そのものの記事は、これが最初です。

白い雲4号の表紙と、「翔んでアラビアンナイト」の記事（抜粋）

TOPIC

新潟県立高田高等学校の生徒が事務所訪問

10月９日、私の母校の高田高校生徒の企業訪問の一環として、当事務所への訪問がありました。

生徒たちは、１年の２学期からゼミ活動で訪問先企業を対象にその企業向けの提案のための議論を重ねてきており、その成果を発表いたしました。当事務所訪問グループのテーマの一つは「AIの進化は将来の弁護士業務にどのような変容をもたらすか」というもので、なかなか先進的な取り組みです。

弁護士 伊藤茂昭

〈主要取扱分野〉不動産取引・建築紛争・借地借家・会社法関係・相続・遺言

Tel：03-6212-5503（直通・秘書）　Fax：03-6212-5700　Mobile：090-1547-4357

e-mail：shigeaki.itoh@city-yuwa.com　〈白い雲Weblog〉URL：www.shiroikumo.jp

シティユーワ法律事務所　〒100-0005 東京都千代田区丸の内2-2-2 丸の内三井ビル（受付7F）URL:www.city-yuwa.com

白い雲 編集後記

あるIT企業が、私生活データをすべて提供してくれる人を募集しているとの記事がありました。条件がいくつかありますが、報酬は20万円。トイレや脱衣所も含め、家の中のあらゆる箇所にカメラが設置されて1ヶ月過ごす。こうして集められたデータは匿名化され、購入価値があるか、商品開発に役立つかを企業にヒアリングする、という実験だそうです。さて、検索エンジンを立ち上げた際、ご丁寧にも、日頃検索している分野の新着情報が上位にあがってくることは皆さんご経験がおありかと思います。また、Twitterで同じような考えの人をフォローしていると、世の中は自分と同意見の人が多数派なのではないかと、錯覚してしまいそうになります。情報の宝庫であるネットの世界は、便利なようでいて、逆に世界を狭める結果になりかねません。あえて紙媒体でお届けする弊紙で、ご興味のない分野にも目を留めていただけたら幸いです。　（編集人　伊藤真理子）

季刊「白い雲」通刊67号
2019年12月発行

発行人：伊藤茂昭
編集人：伊藤真理子
制　作：株式会社創林社
印　刷：神谷印刷株式会社